

戦争と文学についての研究
—フォークナー、ドス・パソス、メイラーの場合—
(共同研究)

A Study on War and Literature
—Faulkner, Dos Passos and Mailer—
(A Joint Research)

依 藤 道 夫	Michio Yorifuji
大 木 愛	Ai Oki
古 屋 功	Isao Furuya

目 次

序 論

第1章 フォークナーと南北戦争

第2章 ドス・パソスと第一次世界大戦

—『マンハッタン乗換駅』における分析を中心に—

第3章 メイラーと第二次世界大戦

—『裸者と死者』までのノーマン・メイラー—

結 語

参考文献

Summary

This joint research paper aims at studying on the deep relation between war and literature in the world of American literature.

The above theme is considered through three cases : William Faulkner and the Civil War, John Dos Passos and World War I , and Norman Mailer and World War II. Each case has its own characteristics. But it seems to be very much possible for us to find the fact that big wars always influenced a great deal upon the then literature and that they not a little contributed to the progress of the literature in each period though it is a very ironical thing.

This paper makes a research especially on how wars gave deep influences upon the above three authors in each way and what they felt, thought and wished to say in their works through their indirect or direct relations with the wars.

序 論

戦争というものは、人類の歴史において、古来絶えず繰り返されて来た。戦争はむろん悪である。多くの人々の命を奪い、心身を傷つける。社会を、家族を破壊する。それは人間の極めて悲劇的な愚行である。

だが、皮肉なことに、そうした戦争が自然科学を始めとして、医学や法律や政治、経済等社会の多くの面で良きにつけ悪しきにつけ、さまざまな発展を促す要因となって来たこともまた否定出来ない事実である。嘆かわしい事態ではあるのだが。

そして、上記のことは、文学の歴史においても指摘できることなのである。即ち、大きな戦争の一つ一つが、古典的な文学作品の傑作を生み出して来たのである。矛盾を感じざるを得ないわけではあるが、古代ギリシャのホーマー (Homer、紀元前10世紀頃) の物した英雄叙事詩『イリアッド』 (*Iliad*) と『オデッセイ』 (*Odyssey*) などを始めとして、レオ・トルストイ (Count Leo Tolstoi、1828-1910) の『戦争と平和』 (*War and Peace* 1864-69) やウィリアム・サッカレー (William Thackeray、1811-63) の『バリー・リンダンの幸運』 (*The Luck of Barry Lyndon*、1844)、スティーヴン・クレーン (Stephen Crane、1871-1900) の『赤色武勲章』 (*The Red Badge of Courage*、1895)、そしてマーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell、1900-49) の『風と共に去りぬ』 (*Gone with the Wind*、1936) 等々を見れば、戦争と文学の因縁の深さがよく分かる。日本の軍記物語たる『平家物語』 (13世紀) や『太平記』 (14世紀) などともそうした分野の好例なのである。

本研究では、アメリカ文学において、南北戦争とウィリアム・フォークナー、第一次世界大戦とジョン・ドス・パソス、そして第二次世界大戦とノーマン・メイラーの場合をそれぞれに考察してみたい。ここで扱う事例は極めて限られてはいるものの、戦争と文学の断ち難い関係性を探り、ある意味では人間の最大の不幸とも言える戦争が人の心や人生、

それに社会をどのように揺さぶり、それがどのように文学に反映されているのかを研究してみる次第である。

なお、各論中の引用文の記載順序を和文、英文の順にしたのは、読者にとって全体的に、読む流れをより一層スムーズに出来ると考えたためである。

第1章

フォークナーと南北戦争

1.

アメリカ合衆国の「南部作家」ウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-1962)は、自身が関与したのは第一次世界大戦(World War I、合衆国は1917年参戦)だったが、そして彼の幾つもの作品が同大戦を扱っていることは確かであるが、彼の意識の底に南部の歴史に関わる南北戦争のことが根強く横たわっていたことは明白である。

第一次大戦に、訓練のみで終わってしまったものの、参加したフォークナーの頭の中では、同大戦と南北戦争が重層して存在することもあったのではなかろうか。

フォークナーの曾祖父ウィリアム・クラーク・フォークナー大佐(Colonel William Clark Faulkner, 1825-89)は、南北戦争でミシシッピ(Mississippi)州の郷里の連隊を率いて出征し、奮戦した。彼はミシシッピ州北部のリップレー(Ripley)の町を拠点にして、弁護士、軍人、農園主、作家、事業家、政治家等として活躍した傑物だったが、ひ孫のフォークナーに大きな影響を与えたことでも知られている。子供の頃、学校の先生に将来何になりたいかと尋ねられたフォークナーは、ひいおじいさんのような偉大な作家になりたい、と答えたものである。

フォークナーは、自身の先祖と家系に深く関わるものとして、南北戦争と南部の歴史に愛着と思い入れを抱いていた。南北戦争とそれに濃く彩られた深南部(the Deep South)、とりわけミシシッピの歴史は、フォークナー文学の基盤の重要な部分を成しており、多くの長短の作品にさまざまな色合いを見せながら反映している。

南北戦争はフォークナー世界の大切な一要素であり、一原点である。そしてフォークナーは、一族の人々や町の人々、特に彼の初期の文学上の指導者だった弁護士のフィル・ストーン(Phil Stone, 1893-1967)たちから曾祖父のことも含めた南部人たちの戦争中の苦悩と奮闘の歴史を聞かされ、また自身も書物等で学んでいた。更には、フォークナー自ら愛車を駆って、古戦場を経巡ったと言われる。

南北戦争は、北部側から見れば、また客観的な視点に立って考えてみても、明らかに南部の側に重い負い目のある戦争であったのであり、この戦争により、南部の農業経済の基盤を成していた悪名高い奴隷制度(Slavery)は、南部の敗北とともに消滅せしめられた。戦争の帰趨は世界史の流れに沿うものであり、その意味では、アブラハム・リンカーン大統領(President Abraham Lincoln, 1809-65)や北軍の掲げた大義は達せられたわけである。

ただ、フォークナー家を含む南部白人層の思いはずっと複雑であり、敗戦により南部の伝統的社会が根底から揺らぎ、覆ることになってしまったことに対する南部人たちの惑いや苦悩、憤りには大変深いものが、容易には癒し難いものがあったのである。そうした惑いや苦悩、憤りを少なからず反映したものがフォークナー文学の世界でもあるわけである。

奴隷制度は崩壊したものの、黒人差別の問題は、たとえばKKKの活動を見ても分かる通り、後々まで残った。それは今日もまだ南部のみならずアメリカ合衆国全体において未解決の課題と言うべきである。フォークナー自身、1949年にノーベル文学賞を受けて世間の注目を浴びるようになったのち、公の席で発言する機会が増えたが、南部の白人保守層の旧態依然たる人種差別主義思想に関しては、彼の発言も歯切れが良くなかった。おおむね中立的立場を取ろうとしたフォークナーは、北部の白黒融合の理想に急ぎ邁進し過ぎる人々、つまり平等を強制する人々にも、また南部の極端な人種差別主義運動に走る人々にもともに反対し、もっと時間をかけて解決してゆこう、と呼びかけている（「北部の編集者への書簡」(1956)¹等を参考にされたい）。

2.

バージニア大学英文科のレイモンド・ネルソン(Raymond Nelson)教授がかつて筆者に指摘したように、20世紀の第二次世界大戦以後に至るまで南部白人たちの多くが北部に対する南北戦争敗北と戦後再建時代の仕打ちへの恨みを根深く持ち続けていた。フォークナーは「すべてがもう過去の出来事です」と言いながらも、たとえば次のように述べている。

百年前、私の国アメリカ合衆国は、一つの経済、一つの文化ではなく、2つのそれだった。お互い対立していたので、95年前、どちらが勝つかを試そうと戦争を始めた。私の側、つまり南部は敗北した。戦闘は大海原の中立地帯で戦われたのではなく、私たち自身の故郷、私たちの庭や農場で戦われたのである。それはあたかも沖縄やガダルカナルが遠い太平洋の島々ではなく、本州や北海道のすぐ近くにあったかの如くだったのである。私たちの土地、私たちの家は、私たちが打ち負かされたあとも留まった征服者たちによって侵略された。私たちが敗れた戦いによって荒廃せしめられただけでなく、征服者たちは、私たちの敗北と降伏のあとも10年間にわたって、戦争が何とかあとに残してくれたわずかなものをもすべて奪い取ってしまった。この戦争の勝者たちは、人々や民族のいかなる地域社会においても、私たちの復権を計ったり、私たちの再興を計るという努力を全くしなかったのである。²

A hundred years ago, my country, the United States, was not one economy and culture, but two of them, so opposed to each other that ninety-five years ago they went to war against each other to test which one should prevail. My side, the South, lost that war, the battles of which were fought not on neutral ground in the waste of the ocean, but in our own homes, our gardens, our farms, as if

1 ジェームズ・メリウェザー編 『随筆、演説、公開書簡』

2 「日本の若者たちへ」（『随筆、演説、公開書簡』）

Okinawa and Guadalcanal had been not islands in the distant Pacific but the precincts of Honshu and Hokkaido. Our land, our homes were invaded by a conqueror who remained after we were defeated; we were not only devastated by the battles which we lost, the conqueror spent the next ten years after our defeat and surrender despoiling us of what little war had left. The victors in our war made no effort to rehabilitate and reestablish us in any community of men or of nations.³

これはフォークナーが1955年(昭和30年)に夏期文学セミナーに出席するため日本を訪れた際述べた言葉である。ここにはフォークナーの南北戦争観の一端が披瀝されており、これは同時に多くの南部白人たちが共有する見解でもあると言えよう。フォークナーのミシシッピ州も、バージニア(Virginia)州やサウス・カロライナ(South Carolina)州、ジョージア(Georgia)州等のように、北軍により深々と侵略、蹂躪された。彼の故郷で、彼の多くの小説の舞台となったオックスフォード(Oxford)の町も同様である。世界史や人権発展史の流れからずれた、逆行的な出来事であったことは当然認識しながらも、フォークナーは旧南部的貴族の末裔の一人として、さまざまな葛藤を覚えながらも、南部人、ミシシッピ人としての誇りを持ちながら南部側の南北戦争を描いた。

南北戦争に言及し、又それを取り上げた作品には『サートリス』(Sartoris, 1929)、『八月の光』(Light in August, 1932)、『アブサロム、アブサロム!』(Absalom, Absalom!, 1936)、『征服されざる者』(The Unvanquished, 1938)、『墓場への侵入者』(Intruder in the Dust, 1948)、戯曲『尼僧への鎮魂歌』(Requiem for a Nun, 1951)その他がある。特に『征服されざる者』の中には7短編が収録されているが、それらはフォークナー家をモデルにしていると考えられているサートリス家と南北戦争及び戦争後の物語をつづっている。たとえば、「退却」(“Retreat” 1934)ではジョン・サートリス大佐(Colonel John Sartoris, W・C・フォークナー大佐をモデルとしている)が連隊を募集したことや第2回マナサスの戦いの後に選挙で階級を落とされたこと、いったん故郷の農園に戻ったサートリス大佐が彼を捕まえにやって来た北軍兵たちをうまく騙して逃走する話などが描かれている。7編のうち最後の「ヴァービーナの匂い」(“An Odor of Verbena”)は、戦争後のサートリス大佐を描いた作品の内の一傑作である。

作家フォークナーが連作小説たるいわゆる『ヨクナパトーファ・サーガ』の第一作として出した『サートリス』に早くもマナサスの戦いを含むバージニアの戦場のことが言及されており、ジョン・サートリスや弟のベイヤード・サートリス(Bayard Sartoris, 戦死してしまう)が従ったジェブ・スチュアート(Jeb Stuart)将軍と北軍との戦いがジョンの妹ジェニー(Jenny, Virginia Sartoris Du Pre)の語りを通じて描かれている。また、ジェファソン(Jefferson)の町(オックスフォードをモデルとする架空の町)の歴史をも描いた『尼僧への鎮魂歌』では、ジョン・サートリスが連隊長としてマナサスの戦いで奮闘したことやサートリス大佐の農園あたりで戦闘があったこと、北軍がジェファソンの中心部を焼いたことなどが物語られている。また、北部からどさくさにまぎれて一旗上げようとやって来たカーペットバガー(carpetbagger)や戦後の南部についての言及も見られる。

『八月の光』では、弧高の牧師ゲイル・ハイタワー (Gail Hightower) が戦場を駆ける騎馬上の曾父の姿を冥想しているし、『アブサロム、アブサロム!』では、トマス・サトペン大佐 (Colonel Thomas Sutpen) が息子ともども出征している。彼ら、即ちハイタワーの祖父やサトペン大佐は、ジョン・サートリス大佐の場合同様に、W・C・フォークナー大佐をそのイメージの基盤としていると言ってよい。

フォークナーは、『墓場への侵入者』において、法律家のギャヴィン・スティーヴンズ (Gavin Stevens, フィル・ストーンがモデルとみなされている) に次のように言わせているが、これはフォークナー自身の北部観と言えるだろう。

われわれ(南部白人と黒人—筆者注)が北部に抵抗しなければならない理由はこれなんだ。われわれを守るためでもないし、われわれの双方が一つになって、一つの国として留まるためでもないんだ、そんなことは、もうわれわれが守っていくものから不可避的に出てくる副産物なんだ、われわれが守りたいものは、三世代前に、われわれがまさにそのためにわれわれの裏庭で血みどろに戦って破れ、それゆえに無傷ですんだもの、サンボは自由な国に住んでいる一人の人間なのであり、それゆえ自由でなければならない、という公理なのだ。……いつの日かルーカス・ビーチャム(殺人者に仕立て上げられた無実の黒人—筆者注)は、白人と同じく、リンチの綱やガソリンを恐れることなしに、白人を後ろからでも射つことが出来るようになる。まもなく白人と同じように、いつでもどこでも投票するようになるだろうし、その息子を白人の行くどんな学校にでも入れられるようになるだろうし、白人がするのと同じやり方で、白人の旅行するところならどこでも旅行できるようになるだろう。しかしそれは、この次の火曜日というわけにはいかない。しかし北部の連中は、それをすぐ次の月曜日に、印刷した簡条に賛否を投ずるということにより、単純に決めて強制できると思い込んでいる。……⁴

That's why we must resist the North: not just to preserve ourselves nor even the two of us as one to remain one nation because that will be the inescapable byproduct of what we will preserve: which is the very thing that three generations ago we lost a bloody war in our own back yards so that it remain intact: the postulate that Sambo is a human being living in a free country and hence must be free. That's what we are really defending: the privilege of setting him free ourselves: which we will have to do for the reason that nobody else can since going on a century ago now the North tried it and have been admitting for seventy-five years now that they failed. So it will have to be us. Soon now this sort of thing wont even threaten anymore. It shouldn't now. It should never have. Yet it did last Saturday and it probably will again, perhaps once more, perhaps twice more. But then no more, it will be finished; the shame will still be there of course but then the whole chronicle of man's immortality is in the suffering he has endured, his struggle toward the stars in the stepping stones of his expiations.

4 『墓場への侵入者』(鈴木建三訳. 富山房)

Someday Lucas Beauchamp can shoot a white man in the back with the same impunity to lynch-rope or gasoline as a white man; in time he will vote anywhen and anywhere a white man can and send his children to the same school anywhere the white man's children go and travel anywhere the white man travels as the white man does it. But it wont be next Tuesday. Yet people in the North believe it can be compelled even into next Monday by the simple ratification by votes of a printed paragraph:……⁵

更にギャヴィンはこうも言っている。

われわれ—サンボ—とわれわれ—が連合すべきなんだ。われわれは彼の権利であってまだ彼の持っていない経済的、政治的、文化的特権と引き換えに、彼の、待ち、耐え、生き続ける能力の所有権を譲り受けるんだ。そこでこそわれわれは栄える。ともに合衆国を支配するのだ。単に難攻不落だけでなく、金銭に対する気違いじみた貧欲と、口先だけの大声で騒々しい国旗へのお世辞のかけにお互いに隠し合っている、一つの国家として存在してゆくことが出来ないのではないかという、あの根本的な恐怖心を除くと、もはや何も共通なものを持たないような、ああいった種類の大衆によってさえも脅かされることのない戦線を作りあげることになるだろう。⁶

We—he and us—should confederate: swap him the rest of the economic and political and cultural privileges which are his right, for the reversion of his capacity to wait and endure and survive. Then we would prevail; together we would dominate the United States; we would present a front not only impregnable but not even to be threatened by a mass of people who no longer have anything in common save a frantic greed for money and a basic fear of a failure of national character which they hide from one another behind a loud lip service to a flag.⁷

こうした北部観は、南部の穏健な白人層によって共有され得るものであろう。因みに、『墓場への侵入者』は、独身の法律家のギャヴィン・スティーヴンズが、甥のチャールズ・マリソン(Charles Marison)とともに、殺人の嫌疑をかけられた黒人のルーカス・ビーチャム(Lucas Beauchamp)の冤罪を晴らす物語であり、フォークナーの黒人種に対する彼なりの愛情の一端が感じられもする作品である。

3

南部社会と南北戦争がW・C・フォークナー大佐を創り上げ、大佐の伝承と南部の土地・風土、そして第一次世界大戦がノーベル賞作家W・フォークナーを創り上げた。第一次大

5 *Intruder in the Dust*

6 『墓場への侵入者』

7 *Intruder in the Dust*

戦では、フォークナーはカナダのトロント(Toronto)の英国空軍(Royal Air Force)に入り、訓練を受けたが、ヨーロッパ戦線に赴く機会は失した。しかし、「失われた世代」(the Lost Generation)の一員として『兵士の報酬』(Soldiers' Pay, 1926)や『サートリス』(Sartoris, 1929)などを書いて、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)やスコット・フィッツジェラルド(Scott Fitzgerald, 1896-1940)、ジョン・ドス・パソス(John Dos Passos, 1896-1970)などと並び称せられている。そして、その後の活躍により終にノーベル文学賞を手にした。

そのフォークナーはもちろん第一次大戦当時の社会や文学から直接的に大きな影響を受けて、文人としてスタートしたが、彼が人間として、作家としてより深層の部分で激しく熱く突き動かされていたのは深南部の歴史の中で赤く炎と燃えた南北戦争によってであったと言えるのではなかろうか。先祖が関わり、一族のその後にも影響した南北戦争を重要な一原点として躍動を続けたフォークナーの創作人生は、ニューイングランドのピューリタンの植民地史とそれに汚^{けが}された自らの家系とを重く背負わされたナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)の人生にも似て、意味深く、重苦しく、またしばしば悲劇的でもある。が、17世紀ニューイングランドの深い森の中から聞こえてくるピューリタンたちの叫びにじっと耳を傾けたホーソン同様に、フォークナーも戦火に燃えて発するミシシッピーの大地の呻き声に引き戻されつつ、また苦悩しつつ、南部の過去の陰影に富んで複雑な軌跡に思いを馳せ、それを通して南部人、アメリカ人の、いや人間の魂の奥底を見据え、人間社会の普遍的な真理や価値を改めて考察、探求し直そうとしたように思えるのである。

(依藤道夫)

第2章

ドス・パソスと第一次世界大戦

—『マンハッタン乗換駅』における分析を中心に—

1. ドス・パソスにとっての第一次世界大戦～原体験

ジョン・ドス・パソス(John Roderigo Dos Passos, 1896-1970)は、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Miller Hemingway, 1899-1961)やスコット・フィッツジェラルド(Francis Scott Fitzgerald, 1896-1940)、エドワード・エスリン・カミングズ(Edward Estlin Cummings, 1911-1962)らと同様に、「失われた世代」(Lost Generation)の作家の一人とされている。この「失われた世代」とは、当時、作家や画家のパトロンとしても活躍していたガートルード・スタイン(Gertrude Stein, 1874-1946)が「あなた方は皆、失われた世代なのよ。」(“You are all a lost generation.”)と言い、それをヘミングウェイが彼の作品『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926)の題辞として付したことがきっかけで生まれた言葉であるということは衆知の通りである。この言葉は、今では、第一次世界大戦(World War I, 1914-1918)の惨禍を直接、間接に体験し、

既成の概念や価値観に絶望した一世代として解されている。事実、ドス・パソスも第一次世界大戦に深くコミットしている。はじめは、ベルギー救済の仕事に、次いでヨーロッパでの野戦衛生隊勤務に応募しているが、これはどちらも採用されていない。1917年、彼は彼の参戦に反対していた父親ジョン・ランドルフ・ドス・パソス (John Randolph Dos Passos, 1844-1917) を亡くしている。この父親は、若かりし頃、同じように南北戦争 (the Civil War, 1861-1865) に参戦した経験を持つが、死後数ヶ月にして、息子ドス・パソスもノートン・ハーゼス義勇野戦衛生隊 (Norton-Harjes Volunteer Ambulance) に志願して、フランスに向かうことになる。この時の様子を当時の文芸評論家マルカム・カウリー (Malcolm Cowley, 1898-1989) は『亡命者帰る』 (*Exile's Return*, 1934) の中で次のように述べている。

戦争がはじまったとき、その頃大学の学生であった若い作家たちは、外国軍隊附属の野戦衛生隊の一つとともにフランス軍に帰属し、フランス軍から給与を受けていた、アメリカ野戦衛生隊かノートン=ハーゼス義勇野戦衛生隊、あるいはイタリア戦線にあった赤十字の野戦衛生隊—に応募するという考えに心を惹かれた。これらは、いちばん早く私たちがヨーロッパにつれていってくれる見込みのある組織だった。私たちは、ドス・パソスの小説中の一人物がいったように、「何もかもが終わってしまわぬうちに」行動にとびこみたいと切望していたのだ。¹

When the war came the young writers then in college were attracted by the idea of enlisting in one of the ambulance corps attached to a foreign army—the American Ambulance Service or the Norton-Harjes, both serving under the French and receiving French army pay, or the Red Cross ambulance sections on the Italian front. Those were the organizations that promised to carry us abroad with the least delay. We were eager to get into action, as a character in one of Dos Passos's novels expressed it, “before the whole thing goes belly up.”²

このカウリーの表現からもわかるように当時の作家達は、こぞって第一次世界大戦に参加していった。ドス・パソスも例外ではなく、むしろ、一任務にとどまることなく、次々と様々な任務を遂行している。1917年の段階では、多くの作家が傷病兵運搬の仕事をしていたが、ドス・パソスもまた、この任務に従事していた。その様子が『亡命者帰る』には以下のように記されている。

1917年に傷病兵運搬車または軍用トラックの運転手をしていた作家たちの名前を挙げることは興味深かろう。ドス・パソス、ヘミングウェイ、ジュリアン・グリーン、ウィリアム・シーブルック、E・E・カミングズ、スレイター・ブラウン、ハリー・クロズビー、ジョン・ハワード・ローソン、シドニー・ハワード、ルイス・ブロムフィールド、

1 マルカム・カウリー『亡命者帰る』大橋健三郎、白川芳郎共訳、南雲堂、1960年。

2 Cowley, Malcolm. *Exile's Return*. 1951: Harmondsworth: Penguin Books, 1986.

ロバート・ヒリヤー、ダシエル・ハメット・……。野戦衛生隊とフランス陸軍輸送隊は、一世代の作家たちのために行なわれた大学の拡張講義であったといってもいいくらいである。³

It would be interesting to list the authors who were ambulance or camion drivers in 1917. Dos Passos, Hemingway, Julian Green, William Seabrook, E. E. Cummings, Slater Brown, Harry Crosby, John Howard Lawson, Sidney Howard, Louis Bromfield, Robert Hillyer, Dashiell Hammett...one might almost say that the ambulance corps and the French military transport were college-extension courses for a generation of writers.⁴

このように、多くの作家達との繋がりを得ながら、この任務を遂行した後、ドス・パソスはイタリア戦線の赤十字隊に志願入隊し、1918年にはイタリアに渡っている。同国に滞在している間、彼は「親ドイツ的」であるとの嫌疑を掛けられ、周囲から無言の脅迫を感じ始める。このこともあり、一時アメリカに帰国するが、その目で戦争が終わるのを見届けたいという思いからであろうか、再びヨーロッパ戦線に向かう機会を手にする。しかし、この船出は皮肉なことに第一次大戦終結の日（1918年11月11日）であった。スパイ容疑を掛けられたことにしろ、このアイロニックな船出にしろ、彼にとっての戦時体験というのは、比較的暗いものであったことが容易に想像できる。自ら望んで踏み込んでいった軍隊という世界の中で、彼は一体、何を感じたのであろうか。彼の初期の作品においては、特に、第一次世界大戦で彼が感じたことが何であったのかを見て取ることができるだろう。1921年に発表されている『三人の兵士』（*Three Soldiers*, 1921）は、大戦での自らの経験がベースとなり、そこで確立した構想が形となって現れている。すなわち、そこにあったものというのは、「個」（individual）と「組織」（organization）の対立した概念において生じる悪循環、矛盾、葛藤である。ここで感じた様々な混乱が、その後、彼を突き動かす原動力になったのは言うまでもないことである。彼のその後の執筆活動において、この混乱が、形を変えながらも根底に存在し、大きな影響を与えていることは紛れもない事実なのである。

2. 『マンハッタン乗換駅』における第一次世界大戦

第一次世界大戦から戻ったドス・パソスは、帰国した1922年から26年冬まで、主にニューヨーク（New York）で暮らしている。『マンハッタン乗換駅』（*Manhattan Transfer*, 1925）が発表されたのは、ちょうどこの時期であった。

1925年、つまり『マンハッタン乗換え』を発表した頃には、ドス・パソスは生涯の危機的な転回点に達していた。彼は戦争によって根こぎにされ、平和から遁走していた。しかも遁走のなかに融けこむことが出来なかった。同じ世代のアメリカ作家の誰よりも、

3 マルカム・カウリー『亡命者帰る』大橋健三郎、白川芳郎共訳、南雲堂、1960年。

4 Cowley, Malcolm. *Exile's Return*. 1951: Harmondsworth: Penguin Books, 1986.

ドス・パソスは、大衆社会という現象に魅せられていたが、彼の精神はいまだ社会的な諸力の形態を、その博物誌と社会史とを本気で研究しはじめてはいなかった。これらこそ、やがて『U・S・A』の大きな主題となるものである。⁵

By 1925, when he published *Manhattan Transfer*, Dos Passos had come to a critical turn in his career. He had been uprooted by the war, he had fled from the peace; but he could not resolve himself in flight. More than any other American novelist of the contemporary generation, Dos Passos was fascinated by the phenomenon of a mass society in itself; but his mind had not yet begun to study seriously the configuration of social forces, the naturalism and social history, which were to become his great subject in *U.S.A.*⁶

ここでも言及されているように、明らかにドス・パソスは、大戦に参戦したことにより受けた衝撃や負った疲労、負担を抱えたまま、執筆活動に突入したと考える。しかし、それにもかかわらず、あるいは、だからこそと言うべきなのであろうか、発表と同時に、この『マンハッタン乗換駅』は、シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885-1951) によって絶賛され、そのことも手伝って、ドス・パソスは徐々に作家としての道を確立していく。

では、時代の流れの中でこの時期というのは、一体どのような空気に包まれていたのであろうか。

暗中模索は行われても、新たな価値がそうすぐに現れるものではない。多くの人々にとっては、戦時中に楽道家や宣伝屋が、たいそういい調子で予告した新時代が、まだはじまらないうちに夜の闇につき落とされ、不安な闇のなかで、彼らはどの道を曲がればいいのかもわからぬ状態に追いこまれたようなものだった。⁷

これは、米国屈指のジャーナリストであるF・L・アレン (Fredrik Lewis Allen, 1890-1954) の目から見た1920年代の姿である。『マンハッタン乗換駅』は、このような時代のニューヨークを様々な側面から描き出した都市小説であると言われている。ところが、空間を軸にしてニューヨークという都市を描いた小説、という見方以外にも、時間を軸としてその中の一時代を切り取るように当時の社会を描いた小説としてこの『マンハッタン乗換駅』を眺めてみると、興味深いことが見えてくる。この作品は、実際、世紀の変わり目から第一次世界大戦を経て20年代初めに至る時代背景を持っており、そこには歴史的事実が実に豊富に盛り込まれているのである。例えば、「大ニューヨーク市」建設の法案の発効 (1898年) や、禁酒法 (1920年から33年まで酒精飲料の醸造、販売、運搬、輸出入を禁止した法律) に関連することなどが背景にある。そして、アレンの言う大戦によっても

5 アルフレッド・ケイジン『現代アメリカ文学史』刈田元司、大橋健三郎他訳、南雲堂、1971年。

6 Kazin, Alfred. *On Native Ground—An Interpretation of Modern American Prose Literature*. 1942: N.Y.: Doubleday & Company, Doubleday & Company, 1956.

7 F・L・アレン『オンリー・イエスタデイ—1920年代・アメリカ』藤久ミネ訳、筑摩書房、1998年。

たらされた「夜の闇」、「不安の闇」も、その背景の中の一要素として見出すことができるのである。戦争というものを主題として扱った『三人の兵士』と比較すると、その取り上げ方は全く異なり、戦争それ自体の場面描写はほとんどないに等しいと言える。ところが、『マンハッタン乗換駅』において、第一次世界大戦というものは、その小説の中心に据えられるのではなく、その根底に静かに流れ、広がっているかのような印象を抱かせるのである。『マンハッタン乗換駅』において、戦争というものにこのような印象を受けるのは、戦場や兵士の様子などが克明に描かれているわけではなく、そこに何かの思想が交えられているわけでもないからではなからうか。

例えば、『マンハッタン乗換駅』は、3部に分けられており、それぞれの部が5章から8章に分けられている。第2部では、主に第一次世界大戦勃発前の数ヶ月が描かれており、関連ニュースも盛り込まれている。この第2部において、読者は、第一次大戦というものを認識することになる。しかし、第3部に進むと突然、大戦は終了し、主人公の一人、ジミー・ハーフ (Jimmy Herf) がヨーロッパから帰国する場面が展開する。つまり、第2部と第3部の間に、実際の第一次世界大戦が存在するわけであるが、小説の中では、その部分の描写が一切なされていない。つまり、大戦の前後で時間が「流れている」のではなく、「飛躍している」のである。この大戦の状況を場面に描写しないことによって、読者は第2部での大戦勃発の認識が残っているにもかかわらず、第3部に入るとすぐ、戦場となったヨーロッパとは異空間に存在する舞台、すなわち、ニューヨークに広がっている世界に吸い込まれていくのである。こうした構成により、読者は、戦争というものが、意識下でじわりじわりと広がり、流れているのを感じるのである。当然、第2部に登場するジミーと第3部に登場するジミーとは、年齢も境遇も立場も違うのである。第一次大戦中の彼の「個」もまた、ここでは欠落してしまう。この時間の操作によって、まるで大戦がその時のある個人の経験や成長を呑みこんでしまっているかのような印象が与えられるのである。

It is interesting that World War I, which is generally considered to have been the prime causative factor in changing American mores (and which is elsewhere carefully analyzed by Dos Passos), is here passed over in a few sentences and by the evocation of a few slogans. The reasons for change are relatively unimportant; it is the experience and the fact of change that is under examination.⁸

作品の舞台はニューヨークという世界第二の大都会。時代は、第一次世界大戦を挟む約30年間。戦場となったヨーロッパはあくまでも、舞台の外にある。戦場を克明に描かないことによって、逆にそれは兵士にとってのみの戦争ではなくなっている。ニューヨークにおける戦争、それは、そこに住む人々の中にある戦争であり、登場人物たち（ほとんどがニューヨーカーである）にとっての戦争なのである。彼が『マンハッタン乗換駅』で描く登場人物というのは、それぞれが「個」であるというよりはむしろ、ある職業の典型、ある性格の縮図であるように思われるが、このような人物たちを登場させ、背景には大戦の

8 Becker, George J. *John Dos Passos*. N.Y.: Frederick Ungar Publishing Co., 1974.

存在を暗示しながらも、作品中に完全なる形で挿入しないことにより、ドス・パソスは現代社会そのものを描こうとしたのである。

There are probably several distinct reasons for Dos Passos' denying himself the method of storytelling which is most in favor and which has the great advantage of impressing the reader with the importance, and so—in the last analysis—with the essential truth of his characters. His project is obviously not to present human nature as it might be, as it may have been under favoring conditions, as it may actually be in exceptional cases, but rather as it impresses him in the main as being today under the conditions actually prevailing. He is himself a sensitive idealist grossly offended and disillusioned by what he finds to be the prevailing tone of human feeling in the world that made the War.⁹

ある批評家は、ドス・パソスが時間を操作すること、すなわち、第一次世界大戦を『マンハッタン乗換駅』の時間の流れの中に敢えて組み込まないことを、上の引用文のように、現状をありのままに表現するためだと解釈している。

また、別の批評家は、『マンハッタン乗換駅』の中に描かれる背景について、次のように述べている。

This novel contains little of what we call social criticism in terms of institutional malfunction or ideological argument. War as a means of controlling the restless masses, the uneven hand of justice, the nonexistent chances of the working stiff, the primacy of money, indifference to genuine artistic vision—all these criticisms are incidentally voiced out of the mouths of various characters, but in no sustained or doctrinaire way. It is changing mores and moral values, without much concern for the forces that produce such change, that are the objects of observation in *Manhattan Transfer*.¹⁰

「際限ない混乱を支配する戦争」をはじめとして、様々な社会的批判の対象となる出来事が、偶然のように空理論的に表現されているというのである。すなわち、戦争を主たる背景として敢えて前面には押し出さずに描いているのである。

3. ドス・パソスが表現したかった第一次世界大戦

『マンハッタン乗換駅』は、まるで時代を切り取ったかのように現代社会をありのままに描いた作品である。しかし、このように描かれた作品の中に大戦は完全なる形では存在しない。つまり、ドス・パソスにとって、大戦が部分的に削除されうること自体が現代社会のはらむ事実なのである。戦争の中にある事実とは、現代社会の中に存する事実と等号

9 Beach, Joseph Warren. *American Fiction 1920-1940*. N.Y.: Russell & Russell, 1960.

10 Becker, George J. *John Dos Passos*. N.Y.: Frederick Ungar Publishing, 1974.

で結ばれる。『マンハッタン乗換駅』において削除されてしまった第一次世界大戦の事実というのは、現代社会において大戦によって呑みこまれたあらゆるものと重なるのである。つまり、この小説においては、欠落した部分(=戦争)にこそ社会が直接反映されている、という意義を見出すことができるのである。

『マンハッタン乗換駅』を執筆した時点でのドス・パソスにとって第一次世界大戦とは、つまり、社会の根底に流れているものであり、それは、あらゆる人間の「個」をその意識下において呑みこんでしまうその対象である、ということではなからうか。だからこそ、戦争そのものを描写することは、彼にとって困難を極めることであったのだろう。

この『マンハッタン乗換駅』の中での第一次世界大戦とは、まさにアレンの表現する「夜の闇」「不安の闇」ということなのである。

(大木 愛)

第3章

メーラーと第二次世界大戦

—『裸者と死者』までのノーマン・メイラー—

1 人間の歴史と戦争と文学

人間の歴史を見ると、その一面として、戦争の歴史であったと言えよう。まるで人間には戦争をする本能があるかのようである。人間というものをひとつの個として捉えた場合、それはとても弱いものである。ライオンのような牙は無い。熊のような爪も無い。馬のように速く走れるわけでもなく、空も飛べない。魚のように自在に泳ぐことができるわけでもない。それでも現在、地球を支配しているのは人間である。それは、人間は道具(武器)を使い、集団を作ることによって結集して大きな力を作ってきたためである。そして、大きな集団で行動することによって、すべての動物に対して優位に立ってきたのである。もはや動物の中で人間の敵になるものはなくなったのである。さて、この集団が生活していく過程で、集団はだんだん大きくなり、彼らはより良い住環境を求めて移動していった。この際、他の集団と接することがあったかもしれない。このとき、お互いに求めているものが同じであり、たがいに譲り合うということをしなければいざこざが起こり、大きい集団同士では争いとなり、これが戦争の始まりとなったのかもしれない。人間の戦争の歴史は、このような起源から生じていったのであろう。そして、現在に至るまで、おびただしい数の戦争が歴史書の大きな部分を占めてきた。

いずれにしろ、それぞれの戦争においては、それをひき起こすさまざまな理由があったのだろうが、いったん戦争が起きれば大変悲惨な結果を招いてきたことは否定できない事実である。文明・都市の破壊、多数の市民を含めた民の死、といったことが起こる。戦争が無い平和な時代に(日本人の多くが現在この状況下にあるが)、冷静に考えてみれば、戦争はいかにあってはならぬものであるかがよくわかる。時代は過ぎて、20世紀も終わりを近づけた。20世紀は戦争の世紀とよく言われる。では18世紀、19世紀ははどうだったのかと言うと、やはり同様である。それぞれ戦争が無かったのはわずか十数年とも、数年とさ

え言う人もいる。裏返せばほとんどいつも戦争をやっていたのである。この点から見ると、戦争は特別な現象ではなく、歴史上、「平和」の状態よりもノーマルであるとも言え、やはり人間は戦争によって歴史を作ってきたのである。

さて戦争が歴史の日常性として常に歴史と共に歩んできたのであるから、人間の文化の象徴の一つとしての文学にもそれを扱ったものが多く存在してきたのも肯けることであり、戦争が織り込めなければ文学の材料はかなり削られてしまうかもしれない。例えば、日本に目を向ければ、鎌倉時代の『平家物語』や、その後の『太平記』などはまさに戦いそのものを描いた作品である。アメリカ文学史においてわれわれがよく知っているところでは、第一次世界大戦後のアーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)、ジョン・ドス・パソス(John Dos Passos, 1896-1970)らが著名であり、特にヘミングウェイは『陽はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)、『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)、『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940)等、いずれも戦場を舞台にした小説を残している。

さてそのヘミングウェイは、経歴を見ると、高校を卒業後にしばらくの間新聞社に身を置いたが、すぐに1918年イタリア戦線への志願兵の募集に乗った。そして、そこでさらに前線への転属を希望し、その後意識を失うほどの負傷したにもかかわらず、退院すると再度前線へと赴き、終戦まで戦った。一種異常ともとれる軍隊志願であったが、その自分で見たり感じたりしたことを表現したいという強い欲求を持っての戦争体験、とくに負傷することを織り込みながら小説を作っていく方法はヘミングウェイ文学の原点とも言われている。彼の体験に基づく文章のリアルさは、ヘミングウェイの作品は平易で読みやすいが思想がないとの批評をもものとしめないようである。

2 ノーマン・メイラーと文学の出会い

そのヘミングウェイを代表とするロスト・ジェネレーション作家たちの活躍が始まった頃の1923年にアメリカ、ニュー・ジャージー州ロング・ブランチ(Long Branch)に生まれたのがノーマン・メイラー(Norman Mailer, 1923-)である。父方の祖父はユダヤ人の移民の出であった。教育熱心な家庭で育ち、メイラーは学校では優秀な生徒であり、読書好きな少年であった。最初は科学に興味を持ち、高校を卒業した後マサチューセッツ工科大学(Massachusetts Institute of Technology)に進学を希望したが、16歳という若さのため入学を拒否された。代わってハーバード大学(Harvard University)の工科に入学し、航空工学を専攻し1943年に卒業する。しかしこのハーバード大学にはいったことが、メイラーも自分の生涯で決定的に重要だったこととしてあげている通り、彼を作家として世に誕生させる大きなきっかけになったのである。仮に第一志望のマサチューセッツ工科大学が彼の入学を許可していたら、作家ノーマン・メイラーは存在しなかったかもしれない、と考えると運命の不思議を感じてしまうところである。

ハーバード大学在学中、メイラーはアメリカ現代作家に熱中し作家になることを決意した。多くの短編小説を書き、雑誌への投稿も始めた。この頃の話は1959年に出版された『ぼく自身のための広告』(*Advertisements for Myself*)中で、メイラーが若いころの作家になりたかった自分の気持ちをあらわしているところからわかる。そして、影響を受けた作家としてウルフ(Thomas Wolfe, 1900-1938)、ヘミングウェイ、フォークナー

(William Faulkner, 1897-1962)、フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald, 1896-1940)、ドス・パソス等を挙げている。1940年に「この世でいちばん素晴らしいもの」(‘The Greatest Thing in the World’)を書き、学生小説コンテストで一等を獲得し、彼の作家としての人生がスタートするのである。これについてメイラーは次のように述べている。

「大学二年のとき、僕はアーネスト・ヘミングウェイの影響をうけたストーリーを盛んに書きまくった。ぼくはドスパソスとファレルにいつそう引きつけられたが、しかしぼくが模倣したのはヘミングウェイだった。——たぶん、彼のほうがやさしいように思えたからだろう。」¹

*In my sophomore year I wrote a great many stories which were influenced by Ernest Hemingway. Although I was more excited by Dos Passos and Farrell, it was Hemingway I imitated — probably because he seemed easier.*²

ここでメイラーは、はっきりと初期の段階でヘミングウェイの影響をうけたことを述べている。1942年にメイラーは、南太平洋の小さな島にいるアメリカ軍が日本軍に攻められるという内容の「天国を目当ての計算」(‘A Calculus at Heaven’)を書いた。1941年12月の真珠湾攻撃によって火蓋を切られた太平洋戦争開始直後、学生たちが熱狂的に戦争について論じ合っている中、メイラーは「偉大な戦争小説はヨーロッパについて書かれるだろうか、それとも太平洋について書かれるだろうか。」と密かに心配していた。そして、それは、メイラーがヨーロッパこそその舞台でなくてはならないとの確信を深めたその翌年のことであった。これについてメイラーのコメントは以下の通りである。

「この作品は『裸者と死者』とは面白い対照をなしている。なぜなら、それは戦争とは実際どんなものかを、想像力を働かせて(書物、映画、戦争通信、そして自由主義精神によって助けられ、ゆがめられて)憶測しようとする試みだからである。

ぼくがこの短い小説で、太平洋戦争について書く事にしたのは、ぼくが熱帯が好きだったのではなくて、①アメリカ軍はすでに太平洋で戦っていた、②太平洋戦争は反動的性質をもっていて、それをぼくの若い進歩的、自由主義的な鼻が、PM誌の社説の助けを得て嗅ぎつけていた、③太平洋について戦争小説を書くほうが、いつそう書きやすかったからである。——ヨーロッパの文化、そしてアメリカとヨーロッパ文化との衝突にたいする特別な感情をいただく必要はないからだ。過去を意識することなしに、ヨーロッパでのこの前の戦争について大作を書こうとしたら、それこそ最悪の失敗をまねくことになるだろう。」³

The piece does make an interesting contrast to “The Naked and the Dead”, for it is an

1 『ぼく自身のための広告』第一部(山西英一訳・新潮社)

2 *Advertisements for Myself Part 1* (Harvard University Press)

3 『ぼく自身のための広告』第一部(山西英一訳・新潮社)

attempt of the imagination (aided and warped by books, movies, war correspondents, and the liberal mentality) to guess what war might really be like.

I chose to write about the Pacific War, it was not because I was in love with the tropics but because 1) Americans were already fighting there, 2) the Pacific War had a reactionary overtone which my young progressive liberal nose smelled with the aid of "PM" editorials, and 3) because it was and is easier to write a war novel about the Pacific — you don't have to have a feeling for the culture of Europe and the collision of America upon it. To try a major novel about the last war in Europe without a sense of the past is to fail in the worst way.⁴

このように一時は視野にいれていたが、その後メイラーはヨーロッパを舞台にした小説を避けてしまった。それはヨーロッパはヘミングウェイの舞台であり、ヘミングウェイを偉大な作家と認めていたため、メイラーはあえてヘミングウェイとの競合を避けたのかもしれない。1943年にハーバード大学を卒業したメイラーは、翌1944年に太平洋戦線へと送られ、レイテ島、ルソン島と従軍した。この間、大戦争小説を書くのだという決意は片時も忘れず、当初タイプライターを打つ仕事や航空写真を解読する仕事を与えられたが、その事務的な安易な仕事よりも斥候など危険な仕事に進んで出て、あらゆる困難な体験を勤めたと言われる。このように小説を作るために率先して危険な戦争体験をしたという点は、第一次世界大戦中、自ら戦争に行き、前線へ赴き、数々の体験を積んでいったヘミングウェイの経歴と重なるものであるし、メイラーがヘミングウェイを小説家としてのお手本の一人としていたと伺えることができるところである。

3 戦争の目的

あってはならないものとわかっていても避けられず、くり返し戦争は起こってきた。しかし、ひとたび起こってしまえば、その指導的立場にいる人たちはその戦争を勝利に導かねばならない。そのためには、その戦争の正当な理由を考え、民衆に伝えなければならない。この一つに帝国主義思想の下で最も顕著になった考えがある。文明国（この時代には西欧諸国を指す）が野蛮な未開国や民衆を相手に戦い、それを支配下に置く。これは歴史の必然的な流ればかりでなく文明の活性化のためにも必要だという考えである。つまり、西欧諸国は文明の低い地の民族のために秩序ある文化的な国を作ってあげるという概念である。しかしこの場合の戦争は、その時の指導者たちが戦争をしたいために起こるのであり、他の領土や資源がほしいために引き起こされたものであるということは明らかである。

もうひとつはこの逆の立場である。自分たちは自分たちの平和を守るために戦争を起こすのだという考えである。自分は平和を望んでいるが、相手はその平和を脅かそうとしている。だから戦争に勝てば平和がやって来るという論理である。例えばアメリカを例にとると、第一次世界大戦は、アメリカそのものの故郷であるヨーロッパがドイツの侵略を受け、それを守るためであり、第二次世界大戦は、再度ドイツのナチズムと日本のパールハーバーの奇襲攻撃に対するものがあつたのである。朝鮮戦争にしてもしかりで、1945年の中

4 *Advertisements for Myself Part 1* (Harvard University Press)

国共産党の成立やソ連の原子爆弾の実験の成功等による共産主義の脅威から自由主義を守るといふ大義名分があった。このような考え方については、当時の日本も例外ではなかった。日本は大陸に進出していたが、当初考えていた以上に中国の抵抗が強く戦争は長期化し、そうした中で当時最大の貿易相手国であるアメリカからの圧力が強まり、国の利益を守るためにと南方進出に踏み切ったのが太平洋戦争の始まりである。

そして戦いが始まると、戦場における兵士や一般大衆に対して士気を鼓舞したり敵愾心を高揚させたりして、民衆は戦争へと導かれていったのである。日本において、第二次世界大戦中、アメリカは鬼畜でイギリスは悪魔だとのラジオ放送が流され、米英を憎むことを教える運動が起こったのもこのような状況下においてである。敵性文化の排除も進められて米英の音楽の生演奏、レコード演奏も禁じられた。野球用語の「アウト」「セーフ」を「よし」「ひけ」と呼び変えられたのは有名な話である。昭和18年末から19年にかけて米軍は中部太平洋の島々を次々に陥落させて、7月にはサイパン島まで来た。日本の敗勢が加速するにつれて、米英の残虐性を強調し、敵愾心を煽るものがメディアでも登場した。昭和19年8月8日の読売新聞は「日本皆殺しを狙ふ米英を断乎滅ぼせ！」との見出しで敗戦後の日本の惨状を描いて見せた程である。一方アメリカ側でも同様に、戦地においては兵士の敵愾心をあおり、洋の東西を問わず戦場における状況への対処法があまり大差がないのが発見できるのである。いずれも戦争で相手を倒すことを念頭に入れた場合、敵に対しての特別な憎悪を持たせる教育が必要とされたと言えよう。しかし、反面それが誇張され過ぎると、それに疑問を持ったり、そのほとんどがでっち上げであるとわかると、反社会へと繋がっていった場合もあったに違いない。ノーマン・メイラーもその一人であり、後に彼の作品の訳者である山西英一氏に宛てた手紙で次のように述べている。

「フィリピン作戦当時、ぼくはまだ年がひどく若くて、21か22に過ぎませんでした。そして、あのころは、日本は下劣な黄色人種だとか、残忍な人殺しだとか、冷酷な拷問者だとか、鬼畜だとかいう、戦時の宣伝を、ある程度信じこまされました。．．．どんな宣伝がおこなわれていたか、くわしくのべる必要はありますまい。」⁵

そしてメイラーは、進駐軍として日本に上陸して駐屯し、そして生活するうちに、戦地において教育を受けたことを一層疑問に思うようになるのである。

4 ノーマン・メイラーと日本 そして「ゲイシャ・ハウス」

1945年8月15日の日本の無条件降伏後、メイラーは所属する騎兵部隊と共に日本へ進駐を命ぜられ、9月に千葉県館山に上陸した。館山に30日間駐屯し、その後千葉県銚子に移り、1946年2月、3月は福島県の小名浜に駐屯した。この間に、メイラーは東京や横浜を何度か通過したようだが、メイラーは銚子や小名浜の田舎町のほうにはるかに引かれたようである。それはメイラーが銚子や小名浜を舞台にした短編をいくつか書いていたり、『裸者と死者』(*The Naked and the Dead*, 1948)の中にでてくる日系少尉ワカラ(Wakara)が、日本軍歩兵少佐S・イシマル(S.Ishimaru)の日記を見て、十二の子供だっ

5 『世界文学体系99 メイラー アメリカの夢』解説(山西英一訳・河出書房新社)

た銚子での祖父母との生活を思いだし、次のように語る場面でもわかる。

日本は見たこともないような不思議な、美しい国のようにおもえた。なにもかも、とてもちっちゃかった。二マイルばかりの銚子の半島は、日本全体の縮図だった。太平洋にむかって、数百フィートの高さに切りたった、大絶壁があった。まるでエメラルドみたいに完全で、きちんと作られた豆絵の林、灰色の木と石塊でつくったちっちゃな漁師町、稲田、悲しげな低い小さい丘、魚の臓腑や人糞が鼻をつく、銚子の狭苦しい、息もつまりそうな町、ものすごいひとだかりの漁港の波止場。なにひとつむだにするものはない。⁶

When he had been in Japan as a child of twelve, it had seemed the most wonderful and beautiful country he had ever seen. Everything was so small.

And in the peninsula at Chosi, in two miles, one could see everything. There were great cliffs which dropped several hundred feet into the Pacific, there were miniature wooded groves, as perfect, as tailored as emeralds, there were tiny fishing towns constructed of gray wood and rocks, there were rice paddies and mournful low foothills, and the cramped choked streets of the city of Chosi with its smells of fish tripe and human dung, the crowded bloody docks of the fishing wharves. Nothing went to waste.⁷

この話に出てくる銚子という土地は、『ぼく自身のための広告』の中の短編「ゲイシャ・ハウス」(‘The Paper House’, 1951)の舞台となっている土地でもある。この作品は、アメリカ兵と売春婦との交際が最終的には強者(進駐軍)ではなく、弱者の女たち(売春婦)の勝利に終わるといのがテーマのものであるが、随所にはほのぼのとした町の良さが描き出されているので少し紹介してみたい。

戦争は終わって、ぼくたちは、兵員のたりない中隊について、日本のある小さな町に駐屯していた。おそらく五十マイル四方には、ぼくたちのほかは、アメリカ兵はひとりもいなかったろう。したがって、規律もやかましくなく、みんな自分の好きなことを大いにやることができた。

ぼくたちはゲイシャたちを田舎に連れ出し、裏道や山道をジープでとぼし、それから海岸へおりて行って、波うちぎわをぶらぶら歩いていった。美しい景色だった。何にもかも、まるでマニキュアみたいに、みがきあげているように見えた。ぼくたちは、小さな松林を過ぎて、小っちゃな谷間にはいり、岩石のふところにだかれている、小さな漁師町を通りぬけて、ピクニックをしたり、話をしたりした。それから、夕がたになると、女たちをゲイシャ・ハウスへ帰した。とても楽しかった。⁸

6 『裸者と死者』第二部(山西英一訳・新潮社)

7 *The Naked and the Dead* Part2(Flamingo Modern Classic)

8 『ぼく自身のための広告』第二部(山西英一訳・新潮社)

The war was over, and we were stationed with an understrength company of men in a small Japanese city. We were the only American troops for perhaps fifty miles around, and therefore discipline was easy, and everyone could do pretty much what he wished.

We would take the girls out into the country, drive our jeep through back roads or mountain trails, and then descent to the sea where we would wander along the beach. The terrain was beautiful. Everything seemed to be manicured, and we would pass from a pine forest into a tiny valley, go through little villages or little fishing towns nestled on the rocks, would picnic, would talk, and then toward evening would return the girls to the house. It was very pleasant.⁹

ここに登場しているゲイシャ・ハウスは売春宿、つまりアメリカ兵相手の慰安所であって、歴史的には駐留していたアメリカ軍の強い要求で市と警察が料理店を改装して設けたものであったらしいが、メイラーはゲイシャ・ハウスを、またゲイシャたちをいかがわしいような雰囲気は一切感じさせず、むしろ明るく、客のアメリカ兵を相手に一種コミカルにも見えるタッチで、銚子の美しい自然を織り交ぜながら描いている。そしてここからわかることは、メイラーが戦争が終わった安堵感を日本の銚子で満喫していたということである。太平洋を望む田舎の漁村での生活は、静かで時間はゆったりと流れていったに違いない。このことは次の一節から決定的にわかるのである。

仕事は、いそがしいことはめったになく、勤務時間はずんずん過ぎていった。ぼくは、あのころみたいに軍隊が好きだったことは一度もなかった。¹⁰

The work seldom heavy, and duty hours passed quickly. I never liked the army so much as I did during those months¹¹

この作品の主人公が語った回想は、まさにメイラーの気持ちであり、真実であったに違いない。そして、メイラーが日本を愛した様子はゲイシャ・ハウスに続く作品「兵士たちの言葉」(‘The Language of men’, 1951)の中にでてくるメイラー自身と思われる主人公、カーター(Carter)と日本人の炊事手伝いの描写にも発見することができる。

何年このかたはじめてひっそり生活することができた。港町は、うつくしかった。将校は一人いるだけで、兵士たちにはかまわなかった。これは、カーターの軍隊生活のうちでいちばん幸福な時期だった。彼は、日本人のK Pが好きになった。彼は彼らの言葉を学び、彼らの家をおとすれ、ときどき彼らに食物の贈り物をした。彼らは彼が大好きだった。¹²

9 *Advertisements for Myself Part 1* (Harvard University Press)

10 『ぼく自身のための広告』第一部 (山西英一訳・新潮社)

11 *Advertisements for Myself Part 1* (Harvard University Press)

12 『ぼく自身のための広告』第一部 (山西英一訳・新潮社)

He lived in comparative privacy for the first time in several years; the seaport was beautiful; there was only one officer, and he left the men alone. This was the happiest period of Carter's life in the army. He came to like his Japanese K.P.s. He studied their language, he visited their homes, he gave them gifts of food from time to time. They worshiped him.¹³

5 メイラーが発見したもの

メイラーは戦場での疲れを癒すかのように終戦後の進駐軍としての生活を、日本においてほのぼのとすごしていったように見える。しかし、自分が戦場で聞いたこと、命令されたことは何だったのか。誰のため、何のための戦争だったのか。自分たちはなぜ戦場に行ったのか。メイラーの頭の中ではこれらの疑問が渦巻いていたであろう。戦場から開放され、体と心が休まるにつれて、平和を取り戻した日本で、メイラーはこれらの疑問を整理していった。そして、以前から持ち続けてきた偉大なる戦争小説を書くんだという気持ちと共に、メイラーは自分が書こうとしている小説の方向性をゆったりと、そしてはっきりと固めていったに違いない。

終戦後日本にいき、個々の日本人から直接すこしずつ知ったことから、われわれのすべてのものと同様に、すべての人間、すべての社会と同様に、日本人もまた自分で罪を犯すよりも、むしろ罪悪の犠牲にされているのだということが、徐々にわかってくるにつれて、ぼくはあの宣伝が恐るべき欺瞞であり、完全なペテンであったことを、はじめて、痛烈に理解したのでした。『裸者と死者』の構想は、ぼくの日本滞在中に生まれたものです。ぼくの激しいラディカルな気質は、この日本滞在の九ヶ月によってはじめてうみだされたものではなかったとしても、すくなくともこれによって決定的にすすめられたことは事実です。

あの日の午後は、『裸者と死者』の微妙な、だが、全体にしみわたっているものを創造したとおもいます。もしぼくがあの士官候補生に会わなかったら、あの本はもっと価値のすくないものとなったろうとおもいます。なぜなら、かれとの会話は、ぼくたちが戦争中、日本人を鬼畜と見なすように、組織的におしえこまれた宣伝の、鈍い最後の層を、みじんに打ち砕いてしまったからです。¹⁴

メイラーは山西英一氏に宛てた手紙でこのように述べている。一年足らずの日本滞在を終えて1946年5月、除隊となったメイラーは、太平洋を舞台とした「偉大なる戦争小説」を作り上げるとの意気込みと構想を十分に胸に抱いて愛妻の待つニュー・ヨークへと帰国し、仕事にとりかかった。1948年5月、『裸者と死者』は出版されると同時に大ベストセラーとなったのである。

そしてメイラーは、生涯で決定的に重要だったことのひとつに太平洋戦争に行ったことを挙げているが、それは彼が悲惨な戦場とその後の日本滞在をつなげて経験して自ら感じ

13 *Advertisements for Myself* Part 1 (Harvard University Press)

14 『世界文学大系99 メイラー アメリカの夢』解説 (山西英一訳・河出書房新社)

取っていったものである。そして、『裸者と死者』が発表された3年後に彼が書いた短編小説「ゲイシャ・ハウス」と「兵士たちの言葉」の中に、『裸者と死者』が作られていく過程の断片を読み取ることができるのである。

(古屋 功)

結 語

戦争と文学について、アメリカ文学の3人の作家たちをそれぞれに探求してみた。個々の戦争により、また個々の文人たちによって意味合いは異なってくるであろうし、また探求の仕方にも違いが出て来るのであろうが、このささやかな一研究が戦争とそれが文学に対して持つ影響度や意味を考えてゆく上での一つのよすがとなれば幸いである。

参考文献

第1章

- Faulkner, William. *Sartoris*. London: Chatto& Windus, 1964.
- Faulkner, William. *Light in August*. New York: Vintage International, 1990.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Random House, 1964.
- Faulkner, William. *The Unvanquished*. London: Chatto& Windus, 1967.
- Faulkner, William. *Intruder in the Dust*. New York: Vintage Book, 1972.
- Blotner, Joseph. *Faulkner A Biography*. Vol.1, Vol.2, London: Chatto& Windus, 1974.
- Cowley, Malcolm (Ed.). *The Portable Faulkner*. New York: The Viking Press, 1962.
- Duclos, Donald P. *Son of Sorrow, The Life, Works and Influence of Colonel William C. Falkner, 1825-1889*, Ph. D. Dissertation for the University of Michigan, 1962.
- Polk, Noel. *Faulkner's Requiem for a Nun, A Critical Study*. Bloomington: Indiana University Press, 1981.
- Wilson, Jack Case. *Faulkners, Fortunes and Flames*. Nashville: Annandale Press, 1984.
- ウィリアム・フォークナー『墓場への侵入者』鈴木建三訳、富山房、1969年。
- ジョン・フォークナー『響きと怒りの作家〈フォークナー伝〉』佐藤亮一訳、荒地出版社、1964年。
- マリー・C・フォークナー『ミシシッピのフォークナー一家』岡本文生訳、富山房、1975年
- 山岸義夫『南北戦争』近藤出版社、1972年。
- 依藤道夫『ウィリアム・フォークナーの世界—そのルーツ』成美堂、1996年。

第2章

- アルフレッド・ケイジン『現代アメリカ文学史』 荻田元司、大橋健三郎他訳、南雲堂、1971年。
- 上西哲雄「Dos Passosの戦争—処理と認識」—『Strata』 (1987年2月) 102~120頁。
- 大橋健三郎編『20世紀英米文学案内 21 ドス・パソス』 研究社、1967年。
- 大橋健三郎『アメリカ文学論集—人間と世界—』 南雲堂、1977年。
- 小田基『二〇年代・パリーあの作家たちの青春』 研究社、1978年。
- 高橋正雄『「失われた世代」の作家たち—20世紀アメリカ小説II』 富山房、1974年。
- ハンフリー・カーペンター『失われた世代、パリの日々—1920年代の芸術家たち』 森乾訳、平凡社、1995年。
- F・L・アレン『オンリー・イエスタデイ—1920年代・アメリカ』 藤久ミネ訳、筑摩書房、1998年。
- マルカム・カウリー『亡命者帰る』 大橋健三郎、白川芳郎共訳、南雲堂、1960年。
- ミネソタ大学編『アメリカ文学作家シリーズ 第四巻』 日本アメリカ文学会監修、北星堂、1968年。
- 武藤脩二『一九二〇年代アメリカ文学—漂流の軌跡—』 研究社、1993年。
- 山川国雄「作品“Manhattan Transfer”におけるDos Passosの構成意図と手法について」—『防衛大学校紀要』 20 (1970年4月) 263~319頁。
- Beach, Joseph Warren. *American Fiction 1920-1940*. N. Y. : Russell & Russell, 1960.
- Becker, George J. *John Dos Passos*. N. Y. : Frederick Ungar Publishing, 1974.
- Brantley, John D. *The Fiction of John Dos Passos*. The Hague: Mouton, 1968.
- Cowley, Malcolm. *Exile's Return*. 1951: Harmondsworth. : Penguin Books, 1986.
- Cowley, Malcolm. *After the Genteel Tradition: American Writers Since 1910*. N. Y. : Norton, 1937.
- Davis, Robert Gorham. *John Dos Passos*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1962.
- Dos Passos, John. *Manhattan Transfer*. 1925: Tokyo: Hon-no Tomosha, 1991.
- Hook, Andrew. ed. *Dos Passos: A Collection of Critical Essays*. New Jersey: Prentice-Hall, 1974.
- Karl, Frederick R. *American Fictions 1940-1980: A Comprehensive History and Critical Evaluation*. N. Y. : Harper & Roe, 1987.
- Kazin, Alfred. *On Native Ground: An Interpretation of Modern American Prose Literature*. 1942: N. Y. : Doubleday & Company, 1956.
- Brown, John Russell. & Harris, Bernard. eds. *The American Novel and the Nineteen Twenties*. London: Edward Arnold, 1971.
- Lewis, Sinclair. *John Dos Passos' Manhattan Transfer*. N. Y. & London: Harper, 1926.
- Wrenn, John H. *John Dos Passos*. N. Y. : Twayne Publishers, 1961.

第3章

- 佐渡谷重信『ノーマン・メイラーの世界』評論社、1975年
なだいなだ『民族という名の宗教』岩波新書、1992年
山西英一訳『ノーマン・メイラー全集 裸者と死者I, II』新潮社、1969年
山西英一訳『ノーマン・メイラー全集 ぼく自身のための広告』新潮社、1969年
山西英一訳『世界文学大系99 メイラー アメリカの夢』河出書房新社、1980年
『昭和20年／1945年』小学館、1992年
銚子市編集、『続・銚子の市史I 昭和前期』、1983年
Rollyson, Carl *The Lives of Norman Mailer* Paragon House, 1991
Mailer, Norman *The Naked and the Dead* Flamingo Modern Classic, 1999
Mailer, Norman *Advertisements for Myself* Harvard University Press, 1992